巻頭特集

目指すは滋賀県ナンバーワン

近江高等学校 サッカー部の挑戦

夏の全国高校野球選手権大会で準優勝した実績を持つ硬式野球部をはじめ、バレーボール部、柔道部、卓球部、陸上競技部など、「近江」の名を背負って全国大会で活躍する部は枚挙に暇がない。そんなスポーツの名門でいま、これまで注目されてこなかったサッカー部が変革の時を迎えている。

ワンプレーを大切に どん欲に1点をもぎ取る

「集中していこう!」

ジリジリと肌を焦がす日差しのなか、ゴールキーパーが叫ぶ。その声にこたえるように、グラウンド上では白熱とした試合が繰り広げられていた。攻めては守り、守っては攻める。そのうち、たった一本のパスがディフェンダーの壁をくぐり抜けた。点を取られまいと必死で追いかけ体をぶつけるが、先に動き出したフォワードにボールが通る。狙いすましたシュートがゴールネットを揺らした。

公式戦でもなければ、他校との練習試合でもない。同じ高校での紅白戦だが、点が入るたびに大いに喜ぶ。それもそのはず、取られた側は悔しげな表情を浮かべながらグラウンドの端に並ぶと、猛ダッシュ。監督が22秒を数え終える前に、息を切らせながら走り抜けた。「点を取られたらペナルティーでダッシュ。点を取られ続けたら、それだけできつい」。先ほどゴール前で檄を飛ばしたキャプテンの吉田舜輝君（3年生）は話す。走り終えた部員は疲労困憊だが、自分から休みたいとはいわない。「もう一試合お願いします!」と皆で頭を下げ、試合が再開した。一つ一つの動きに対して、極限まで集中。「絶対に点を取られない」「何が何でも1点をもぎ取る」。闘志あふれる表情から、そんな思いが伝わった。

「いま目の前のボールに対して、本気で向き合っているか。毎日、勝負をかけているか。心持ちの違いで、未来が変わってくる」と近江高校サッカー部を率いる前田高孝監督は話した。目標は「滋賀県のナンバーワンになる。そして全国へ行く」。ひたむきな姿から、決して高すぎる目標ではないと感じる。

監督
前田高孝さん
「滋賀県北部でサッカーをしている子どもが目指す場所になるようにしたい。その上で、県全体のサッカーレベルを上げていきたい」

1年生
竹村健汰くん
「先輩も気さくに接してくれて、いい雰囲気のチームです。いずれはチームをまとめる存在になれるようがんばります!」

3年生 キャプテン
吉田舜輝くん
「チームができてから日は浅いですが、気持ちが上手くのると一気に強さを増します。県1位という目標に向けて一丸となっています」

1 元プロ選手として戦い続けた経験が指導に生きる。実践的と部員たちは口をそろえた　2 点をどのように奪うか、また守り抜くか。紅白戦でも妥協を許さぬプレーが続く　3 1年生が多く、他校に比べると小さい選手が目立つ。しかし、闘志は人一倍強い　4 ワンプレーの大切さを各選手が意識。ボールを持っていないときもゴールを意識して動き、自然と支え合うプレーが生まれる

滋賀県北部に強豪校を サッカー少年の受け皿に

近江高校サッカー部には72人の部員が在籍している。強豪校といっても差し支えない部員数だろう。しかし、部員の構成を聞くと驚く。3年生と2年生は2人ずつで、大部分は1年生だ。

部の歴史は長いが、硬式野球部や柔道部、バレーボール部などと違い、昨年までは強化指定をされていなかった。人数もいまのように多くはなく、のんびりとした雰囲気。全国大会に出場するような華々しい結果はなく、現在も滋賀県の3部リーグに所属している。優勝を目指し、本気でサッカーに打ち込みたいという部員もいたが、全体の空気を変えるには至らなかった。

「本気でサッカーをしたかったけれど、アルバイトや勉強などで忙しい人も多くて、なかなかうまくいかなかった」と吉田君も話す。物心ついた頃からサッカーボールに触れてきただけに、もどかしい日々が続いた。しかし昨年、前田監督が就任すると、部の雰囲気は一変した。

サッカー部変革の一因となった前田監督は、選手として実績を残してきた指導者だ。長浜市で生まれ、草津東高校に進学。清水エスパルスにスカウトされ、プロ選手となった。その後はシンガポールやドイツなどでもプレー。引退後は関西学院大学に進学し、同校のサッカー部や中学生のクラブチームで指導し実績をあげてきた。

「近江高校サッカー部の監督を引き受けたのは、滋賀県北部に強豪校がなかったため。私もサッカー部が強い高校を志望した際、南部の高校しか選択肢がなかったんです。近江高校が、高いレベルでサッカーがしたいと考える子どもたちの受け皿になれば」。

さらにコーチ陣もアルビレックス新潟やFC岐阜で活躍した元Jリーガー、豊富な海外経験をもつ元選手がそろう。卒業後の進路に大学はもちろん、Jリーグや海外でプレーする夢を抱けるように、環境を整えつつある。

サッカーでも日常生活でも 最良の選択ができる力を

「現役の時は結果を求められ、追い詰められていました。引退後も特に指導者になろうとは考えておらず、大学に進学して選択肢を広げようと思っていたんです」と前田監督は話す。在学中に自分が夢見ていたことを全部しようと、活発に動いた。兵庫県で小学生向けのサッカースクールを立ち上げ、シンガポールやマレーシア、タイなど各国を巡り、ボランティアに従事しながらフェアトレードなどを学んだ。「孤児院に行き、子どもたちと一緒にサッカーをしていると、本当に楽しそうで……」。その時に見た笑顔が、いまの指導に生きている。

厳しい練習に明け暮れる部員たちの表情は、みな生き生きと楽しそうだ。「一週間、いろいろなメニューに取り組めるので、飽きずにできる。何より監督についていけば上手くなれるし勝てる。そう思えるような頼りがいがあります」と竹村健汰君（1年生）は話す。

「監督が教えてくれるのは、自分で考える力が大切ということ。身に付けるために、部員同士で意見を交換しています。明るく、前向きな雰囲気があります」と吉田君も続いた。

「伝えたいのはサッカーの本質。自分のプレーによって何が起こるか、可能性を常に想定する。サッカーでも、日常生活でも、常に最善を尽くせる人間に育てたい」。前田監督自身が、これまで可能性を広げるために努めてきた。誰かにいわれて決めるのではなく、自分自身が道を切り拓く力を身につけて欲しい。自分の足でしっかり立ち上がった11人が、仲間を思いながら、グラウンドで理想のプレーを表現できれば、滋賀ナンバーワンの夢に近づく。

練習に励む部員たちを見ながら、「まだ始まったばかり。すべてはこれから」と監督はいう。しかし、上を目指して奮起したいま、前期だけで上位リーグへの昇格が決まった。努力と思いが結果に結びついている。琵琶湖から遡上する鮎のように、上を目指して突き進む青いユニフォームを、全国の舞台で見られる日もそう遠くはない。

フリモARで動画をチェック!
部員たちの意気込みを聞けます

近江高校サッカー部。学年を問わず、実力順にAからCチームにわかれる

文／野村亮輔　デザイン／chica